中村光夫全集

第十三巻

筑摩書房

中村光夫全集　第十三巻
昭和四十八年一月二十五日発行

著者　中村光夫

発行者　東京都千代田区神田小川町二ノ八
井上達三

発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房
郵便番号　一〇一―九一
電話　東京(291)七六五一(代表)
振替　東京四一二三
印刷　株式会社精興社
製本　牧製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72513 (出版社) 4604

第十三巻　目次

人ごみのなかで……3
チャタレイ判決への疑問……12
日本人の知性……18
忘れられた人たち……31
素人雑誌礼讃……34
虚像と実像……37
個性を超えた真実……44
天才の亡霊……50
芸術家と芸人……55
知識階級……58
第二の開国……96
日本の近代化……102
老子の言葉……135
四十九年の非……137

日本を忘れた芸術家たち……140
明治人の心……152
沖縄……170
歴史は繰り返すか……174
老人用の書物……176
教育が奪ふもの……178
サド裁判によせて……179
学校とスポーツ……186
死の芸術……190
狂気の変質……192
立憲政治……195
オリンピックと戦争……198
知識人……201
新しい「幻滅時代」……205
「マクベス」の妖婆……210
戦争の記憶……216

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アメリカの友人へ……223
昭和を昭和とするもの……230
戦後の二十年……236
明治初年のパリ……242
鎖国の心情……245
我国文化の試金石……251
富士山の五合目……254
活字……261
明治と昭和……264
ミシェル・ルヴォンのこと……266
「近代」の借り着……270
百年前の知識人……284
日本の近代……287
明治百一年……296
この奇妙な観光施設……299
価値の倒錯……301

ほんたうの教育者はと問はれて……302
パンと見世物……305
猥褻の概念……308
「変質する大学」像を求めて……311
木から石への変化……321
美徳と幸福……324
パリと日本人……329
六十年の周期……336

青春と知性

青春の欺瞞……343
青春について……346
幸福について Ⅰ……350
幸福について Ⅱ……362
幸福について Ⅲ……370

知性と倫理……374
生活と思想……381
結婚の理想と現実……386
他家へ嫁いだ娘へ……393
心に触れる言葉……397
自分の恢復……401
現代と美……408
友情について……412
青年といふ名の虚像……415
教養について……420
表現の自由について……434
友への手紙
フランス通信……444
欧米をめぐつて……473
文化のうちそと……506

読書について

読書について I …… 514
読書について II …… 526
読書について III …… 536
読書の方法 …… 543
私の読書遍歴 …… 546
「悪の華」以後 …… 548
色と徳 …… 555
読書随想 …… 557
読書の道 …… 561
新読書論 …… 566
*
小説の読みかた …… 569
文学の鑑賞 …… 587
若い人にすすめる書物 …… 591

日本の短篇小説……593
現代文学案内……610

永井荷風・人と作品

永井荷風……625
永井荷風の文学……632
「あめりか物語」……641
「ふらんす物語」……645
「地獄の花」「夢の女」……648
「腕くらべ」……652
「すみだ川」その他……656
「濹東綺譚」……659
「日記」……661
「戦後作品集」……663

谷崎潤一郎の作品

「小さな王国」……666
「蓼喰ふ虫」その他……668
「卍」……673
「細雪」……677
「瘋癲老人日記」……681
解説……吉田健一 683
解題……693

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

文明論（二）

人ごみのなかで

日本の人口が九千万をこしたといふ記事がさきごろ新聞をにぎはしました。明治の初年には約三千万であつたとすると、約百年たらずのあひだに約三倍にふえたわけです。

むろん僕は人口問題にはまつたく素人ですから、このことが我国の将来にとつて喜ぶべきことか悲しむべきことかを論断しようとは思ひません。

ただこれだけの狭く山の多い島国で、中国、印度、ソ連、米国などの大陸国家につぐ数の人間を養ひ、平地における人口密度では世界一だといふ事実が、今日の日本のもつとも際立つた特色であるとすれば、それが僕等の生活や文化にどういふ影響を及ぼしてゐるかを少し考へて見たいと思ひます。

人口の増加は、たんに出産数の増加だけでなく、死亡率の低下を裏付ける衛生設備の改善、経済の伸張などを前提とするとすれば、明治以来の人口の急増は、我国が西洋文明の摂取によつてなしとげた（国運の発展を含めた）生活の改善を端的に象徴するものと云へませう。そしてこのふえすぎた人口が、国民の生活をことごとに圧迫するやうな事態がいま僕等の眼前にあるのは、この「文明」の影響が僕等にとつて必ずしも幸福をもたらすものでなかつたことを、数字に見える形で示してゐるのかも知れません。

むろん、我国の人口増加の原因を西洋文明だけに帰することはできないでせう。そこには、伝統的な家の観念や子宝の思想が強く働いてゐたことは否定できません。或る人々はそこに廉価な労力と兵力の給源の確保を希つた支配階級の策略を付加へるでせう。しかしこれらの欲望に実現の機会を与へたのは、西洋文明——とくに工業——の移植であることは間違ひない事実です。

この結果として、僕等の生活が幸福でゆたかになるより、むしろ不安で多忙になつた方が多いとすれば、そこ

に僕等が西洋の文明を、受取る上で上手に立廻つたつもりで、結局大きな間抜けをやつたことになりませう。

或る西洋の作家に会つたとき、彼が日本では人口問題が大変だらう、と云ふので、いやそれよりもそれだけ大勢の人間が生きるための内面の拠り所を失つたことの方が、今の日本にとつてさしせまつた問題だと答へたことがありますが、この二つは、よく考へて見ると、互に連関がありさうです。

西洋文明の影響が、僕等が祖先からうけついだ生活や思想と、有機的に混りあひ、新たな醗酵をおこしてこれを内面から変化させるといふやうな過程をとらず、既成の知識、思想、工業製品、法律制度などの目まぐるしい輸入を通じて、いはば生命のつながらぬ、外的な力として僕等の生活を変貌させてきたことに、明治以来の日本の社会の特色があり、このやうな社会に生きようとする者は、程度の差こそあれ、順応主義者にならざるを得なかつたわけですが、ここで、自己の内面の論理を通さうとするやうな迂愚な贅沢に耽ける者を、ただちに不適合な劣敗者として蹴下した社会の圧力には、増大する人口を背景にした生活難が強く働いてゐたと思はれます。

かういふ生活の圧迫からくる知識階級の息苦しさが意識されだしたのは明治四十年代であり、それを日本文明の特質と見て、はつきり描いたのは漱石だと思ひますが、その漱石は、西洋文明が日本人の心理に及ぼした影響について次のやうに書いてゐます。

「(一)、金の有力なるを知りし事

(二)、金の有力なるを知ると同時に金のあるものが勢力を得し事

(三)、金あるものゝ多数は無学無智野鄙なる事

(四)、無学不徳義にても金あれば世に勢力を有するに至る事を事実に示したる故国民は窮屈なる徳義を棄て只金をとりて威張らんとするに至りし事

(五)、自由主義は秩序を壊乱せる事

(六)、其結果愚なるもの無教育なるもの齢するに足らざるもの不徳義のものをも士大夫の社会に入れたる事

(七)、昔時は金の力を以て社会的の地位は高まらざりし事御用達は一個の賤業にして金ある為め尊敬を受けざ

りし事」

以上は、明治三十四年の春、ロンドンで書いたと推定される「断片」ですが、西洋文明の本体にふれた漱石の眼に故国の姿がどう映つたかがこの文章に生き生きと現はれてゐます。漱石が帰朝後に作品で展開した日本文明にたいする批評が、煮つまつた形でここに要約されてゐると云へます。

「吾輩は猫である」から「野分」「それから」のころまで、漱石が金持をほとんど病的に嫌悪したのは周知のことですが、なぜさうだつたかといふ理由もここにはつきり示されてゐます。

ことによると浅薄な読者はこの文章の字面から、当時の資本主義化して行く日本にたいして、漱石の封建的教養が云はせる感情的反撥をしか見ないかもしれません。しかし漱石の怒りはたとへこのやうな時代の趨勢を食ひとめるにはまつたく無力であつたにしろ、感情から発したものでなく、当時の日本の生きてゐた精神的状況が他の誰よりもはつきり見えたところから来る、私心を挾む余地のない熱情であつたのです。彼は日本の過去をなつかしんでゐたのではなく、将来を見詰めてゐたので、この無償の怒りと、それに伴ふ無力の意識が彼を「神経衰弱兼狂人」にしたのです。

資本主義の社会では金銭が万能であるのは、どこの国でも同じことであるにしろ、我国のそれは、ヨーロッパやアメリカのと違つて、自国の経済の内部でおのづから芽生え成長したものでなく、外来の制度として移入された点に特殊な性格を持つてゐます。

西洋の影響として、これまで表面的には蔑視されてゐた「金の力」が公然とみとめられたことで、新しい時代が始まつた、と漱石は云ふのです。彼によれば西洋の影響のもつとも実質的な様相は、金力の解放から生じた、その社会支配であり、なにもかもが公然と金で買へる時代の到来は、結局金持の多数である「無学無智野鄙」な人間に至上の権力をあたへることになるといふのです。

かういふ漱石の考へは、多くの作家の思想がさうであるやうに、生のままの形で述べられると、偏つた子供ら

しいものと思はれるかも知れません。

しかし彼の直感は、日本の資本主義化がとくに国民の精神生活にもたらした特殊な様相をよく捕へてゐると思はれます。

金が純粋に煮つめられた人間の欲望の象徴である以上、金持が隠然たる勢を社会において占めるのは、どこの国、いつの時代にも見られる現象でせう。しかし、個人の生活にも金で売り買ひできぬ部分があるやうに、社会も健全な状態にある限り、金で左右できぬ権威がある筈です。これは建前として金の力をみとめぬ封建社会や共産主義の社会だけでなく、資本主義と云はれる社会でもヨーロッパでは存在するのです。ヨーロッパ人の金銭欲は日本人よりもはるかに強く、金銭の力は社会のあらゆる隅々に滲み透つてゐますが、さういふ風に誰しも金銭の力と害をよく知つてゐるゆゑに、それから守るべきものは守る智慧がおのづから多年の間に身についたのでせう。

資本主義を自分の胎内から発生させた国々では、その害に対応する抗毒素が、おのづからできるのが自然の理法でせう。

ところが資本主義を西洋から新たな「文明」として輸入した我国では、それに伴つて移植された新たな考へや生活の態度が、これまでの伝統にたいして、ちやうどバクテリアの初感染の生体にたいすると同じ破壊力を振つたので、その一例として、宗教が我国でどういふ状態にあるかを見れば、足りると思はれます。

「自由主義は秩序を壊乱せる事」といふ漱石の言も金力以外のすべての価値が失はれたことが、生活にこれまで保たれてきた調和を破壊したことを指してゐるので、この秩序は社会のそれでもあるし、個人の内面のそれでもあるのです。

人間がもしある仕事のそれ自身としての価値を信ずることができ、社会がそれを正当と認めるやうな環境があれば、金銭は彼にとつて二次的な意味しか持ちません。したがつて金銭がすべてを支配する社会とは、あらゆるものが価値の自律性を失つて行く社会です。このやうな社会で人々にあたへられた原則的な平等の意識が、彼等

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com